

共生のきずなを求めて!

# NPO 現代座

2023 年 12 月 1 日 発行  
(通巻 499 号) 定価 100 円

## 現代座レポート No. 96

- ・「わすれものはありますか」公演 無事終わりました (1)
- ・「小さなカフェ」から「くらしの足フォーラム」へ (2)
- ・「誰でもできる朗読教室」の活動 長谷川葉月 (3)
- ・われらいずこより⑩ 1975 年・創立十周年を迎えて (4-6)
- ・「岡田京子さんの 90 歳超えを祝う会」 今村純二 (7)
- ・CD「時代とともに生きた歌」ができました (8)
- ・会館日誌・会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987



### 「わすれものはありますか？」公演 無事終わりました

武本英之作「わすれものはありますか？」は、9月29日から10月2日まで現代座ホールで5ステージの公演をし、240人の方に観ていただきました。

◆これは2018年に亡くなった武本英之さんの追悼公演として企画し、命日の9月30日には終演後、武本さんの思い出を語り合う追悼の集いも行われました。

◆今年さらには「くらしの足をみんなど考える全国フォーラム」実行委員会でも12月1日に千代田区市ヶ谷の自動車会館で追悼公演が行われました。(2頁で紹介)

◆武本さんはタクシーの業界新聞の記者として全国を走り回り、タクシーの問題だけではなく、人々のくらしの中の「足」の問題について、広く深く考えていた方でした。現代座と出会ったことで「なんとか芝居にしたい」という思いを持ち、木村快に弟子入りして書いたのが「わすれものはありますか？」です。

◆この作品の内容は、タクシードライバーのリキさんと移動支援NPOの塚本さんが、ひとり暮らしで脚を骨折して自由に動けなくなった芳子おばあさんを支援しようとしていますが、「誰の世話にもならない」と拒否され、悪戦苦闘しています。芳子さんにどのような過去があったのでしょうか。ところが、思いがけないことから、芳子さんの心の扉が開き始めます。

◆初演は2008年、現代座3階小ホールでした。大変好評で2010年まで何度も公演し、タクシー協会の集まりや、移動支援NPOの関係者の皆さんの集いにも出かけて行って公演しました。

◆今回は15年ぶりの再演ですが、すべて新しい出演者とスタッフで創ることになりました。はじめて現代座に出演する俳優も3人います。タクシー会社に見学に行つて色々教えてもらった、移動支援NPOの方に来て頂いてお話を聞いたりして稽古を重ねましたが、最初は中々思うようにはいきませんでした。

しかし幕をあけて夢中になって舞台をつとめていると、お客さんの反応によって、自然に心が動くようになっていきました。

芝居は知らず知らずのうちに、お客さんの心の内を自分の身に発見する仕事であるようです。

◆公演を通して、今回も武本さんが考えていたことを、改めて教えていただくことができました。本当に「追悼公演をやった良かった」と思いました。

ご協力くださった皆様、ありがとうございました。

木下美智子

「小さなカフェ」から「くらしの足フォーラム」へ

くらしの足全国フォーラム実行委員  
(東京交通新聞社) 竹ノ内博美



NPO現代座が武本英之さんの「わすれものはありませんか？」の再演を検討しているから、くらしの足フォーラムも関わったかどうか。そんな話を「せたがや移動ケア」

の鬼塚正徳さんから聞かされたのは今年の春。「まずは現代座に行って、お話をうかがってみよう」ということになり、フォーラム事務局長で「かながわ福祉移動サービスネットワーク」の清水弘子さんと3人で、現代座を訪問した。6月1日のことだった。

「くらしの足フォーラム」というのは、全国の交通事業者、研究者、自治体・国の行政マン、NPO福祉有償運送団体、交通コンサルなどが分野や立場を超えて一堂に参加して移動の課題を語り合う「くらしの足をみんなで考える全国フォーラム」のことで、武本さんの発案で2012年に誕生し、命名も武本さんによるものだ。

しかし、いくら武本さんが発起人で、その後も運営の中心を担っていたとはいえ、それと武本さんが仕事の合間に書いていた脚本とどのような関係があるのだろうか。武本さんの部下で実行委員も仰せつかった私は正直、少々困惑していた。

現代座事務局の木下美智子さんはまず、武本さんが「わすれものはありませんか？」に着手するきっかけを話してくださった。その時初めて「わすれものはありませんか？」には、その前に木村快さんの作品「小

さなカフェでタクシードライバー物語」があった、この作品に感化された武本さんが「タクシードライバー物語2」として書き上げたことを知った

木村さんの作品「小さなカフェ」というのは、「出会い」という名の小さな喫茶店に集まる人々の物語。休憩に来るタクシードライバーたちと、地域おこしや環境問題に取り組んでいるボランティア関係者という普段は全く別の世界で生きている2つのグループに、ふとしたきっかけで思いがけない交流が生まれるという話だ。

「そうか！武本さんはなぜ、くらしの足フォーラムなる仕掛けを作ったのか。芝居の中で繰り広げられる本音の交流、交流から紡ぎ出される何かを、いつそのこと現実にやってしまおうよ、ということだったのではないか？」。小さなカフェからフォーラムへ。現代座の芝居とフォーラムが繋がった瞬間だった。

くらしの足フォーラムは今年で12回を迎えた。立場も分野も利害も越えて「フラットな関係」のもとで、本音で語り合おう、知り合おう」という開催の趣旨は今も変わらない。霞が関のトップ官僚もIT会社のエンジニアも、タクシー乗務員も福祉移送ボランティアの主婦も、車座で語り合い、酒を酌み交わす。現に12月1日(金)に開かれたフォーラム主催の「観劇シンポジウム」でもそのような語りの場が生まれた。実行委員会には開催後に参加者の熱い思いがメールなどで寄せられ、新たな集いの場「カフェ・わすれものはありませんか？」も誕生しそうな勢いである。

武本さんはフォーラムの命名にあたり「みんな」という言葉を入れることにこだわった。その思いは、現代座の作品と共にこれからも生き続けるだろう。



武本英之 たけもとひでゆき  
(1966-2018)

早稲田大学卒。東京交通新聞に勤務しながら、2009年からはNPO現代座の運営委員を勤め、2016年8月まで現代座機関誌に毎号「現代座を支える人々」を執筆連載。

「わすれものはありませんか？」  
取り組んだスタッフと俳優



最前列 黒澤義之【演出】 長谷川葉月＝芳子ばあさん 木村快 木下美智子【制作】  
中列右 東志野香【制作】 清水理彩＝案内係 丸山夏歩＝相談受付 八木澤賢＝タクシー運転手  
中列左 木下敬志【スタッフ】 丹波 梓＝専務 伊藤嘉朗＝支援 NPO 八木浩司＝介護運転手  
青木文太郎【演出助手】 矢川千尋【アナウンス】

## 「誰でもできる朗読教室」の活動

長谷川葉月

11月22日(水)と23日(木・祝)の2日間にわたり「誰でもできる朗読教室」の2023年6月期生発表会がありました。発表者は25人と今までで一番多く、そのうちの5名が初参加です。

ちょうど、風邪が流行っている時期なので、みなさんの体調が心配でしたが、集合時間になると続々と到着して安心しました。いつもと違う3階の雰囲気、気持ちが高揚しているようでした。なにしろ、客席の段差が作っており、照明の八木浩司さんがシユートをし



11/22(水)に朗読発表した「2023年6月期 水曜教室」(後列左より)手塚修、環笑子、本田典子、宍戸知美、尾花はるみ、井上照美、大久保節子(前列左より)江花幸子、井上尚子、長谷川葉月(講師)、勝木ルミ子、佐藤忍、高嶋悦代



11/23(木)に朗読発表した「2023年6月期 木曜教室」(後列左より)五味孝宏、田島千鶴子、向井奈緒子、八木裕子、飯田恵理、田中ヒロミ、羽鳥宏子(前列左より)早乙女裕子、古明地節子、長谷川葉月(講師)、須藤孝子、今井治江、野本ゆうこ

ていたりしましたから。さらに今回は、生徒さん自身が舞台上に生花を飾り付けて華やかにしてくれて、「私たちの発表会！」感が増した舞台となりました。

3階に、お客様をお迎えして朗読発表するのは数年ぶりです。全員一緒にウォーミングアップしたり、お昼を食べながらのおしゃべりも楽しそうでしたし、若い方の着物の着付けをしてあげたり、世代を超えて和気藹々としている様子は微笑ましかったです。

今回、際立っていたのは、みなさんの作品選びでした。世界各地で戦争が起こっていることもあり、両日とも平和をテーマにした作品が多いように感じました。「カンちゃんの夏休み」(吉田みちお)、『世界で一番の贈り物』(モーパッサン)、『子供の十字軍』(プレヒト

普段自分では決して選ばないような本に出会える愉しみもありました。

芥川龍之介、辻邦生、江國香織など有名作家の作品はもちろん、師匠と弟子との比較が楽しい『モナリサ』(夏目漱石)、『夢十夜』(夏目漱石)、『花火』(内田百閒)。戯曲『指環』(江戸川乱歩)、落語『めぐろのさんま』(川端誠)は朗読の枠をぐんと広げてくれましたし、歌舞伎の口上「外郎売り」のノリの良さで会場全体が沸きました。絵本や童話も多く、『100万回生きたねこ』(佐野洋子)、『かみなりむすめ』(斎藤隆介)、『花さき山』(斎藤隆介)に心があたたかくなりました。クスツと笑いを誘う『とんかつ』(三浦哲郎)、犬の一人称で面白く書かれた『主人・ポチのこと(一)』(町田康)、『綿雲堂』(田丸雅智)、『いちようの実』(宮澤賢治)、『青森ドロップキッカーズ』(森沢明夫)では会話部分の朗読が巧みで、どこかに実際の人物が存在しているかのように感じるほどでした。

聞きに来てくださるお客様は、ほとんどが家族やお友達だと思いますが、舞台上での堂々とした姿を見て、きつと誇らしく感じたことと思います。出演者をあたたかく包んでくれる姿が印象的でした。

その後の懇親会では、みなさん大成功の笑顔の乾杯。そして、一人ずつ感想を述べてもらうのですが、初参加の方が「舞台装置もあり、スポットを浴びて、こんな贅沢な空間で発表できることに感謝です、気持ちよかったです！」の感想に思わず拍手が起きました。

「見守って聞いてくれる温かい仲間の存在に助けられました」の言葉がいうように、朗読は一人での営みですけれど、仲間がいればこそ楽しさは倍増。来期も元気にみなさん、声を出していききたいですね。

、「慟哭」(大平数子)、『蘭』(竹西寛子)、また回想シーンで戦場の場面が描かれる『ふなうた』(三浦哲郎)など。朗読を聞きながら、心がたくさん揺さぶられて涙があふれてくることもありました。

もちろん、それだけでなく、作品はバラエティに富んでいて、

木村ノート◆われらいずこより来たる 第3部  
⑩ 創立十周年を迎えて

木村快

【第1部】日本新劇史・資料からのまとめ

- ①・レポート81号 1950年、新劇運動の分裂  
中間派は「ヴェリテ・せるくる」を設立。  
②・レポート82号 1951年、ヴェリテ解散。  
真山、草村、楨村で新制作座。  
③・レポート83号 1954年、庶民の新劇を標榜  
労働組合関係者の支持で全国公演が始まる。

【第2部】活動に参加した木村快の視点から

- ④・レポート84号 1959年(1)特別研究所開設。  
⑤・レポート85号 1959年(2)巡演活動の実態  
⑥・レポート86号 1960年 安保闘争。  
平和集会では国際的要人からも注目が集まる。  
⑦・レポート87号 1963年(1)  
インドネシア訪問日本文化使節団の公演記録  
⑧・レポート88号 1963年(2)  
ユートピア新制作座文化センター設立。  
⑨・レポート89号 1964年  
ユートピアの破綻・劇団員・従業員の首きり。  
⑩・レポート90号 1965年(1)  
世の中から捨てられた若者たち

【第3部】生まれ変わって

- ⑪・レポート91号 1965年(2)  
新しい生き方を探して  
⑫・レポート92号 1969年 最初の試練  
⑬・レポート93号 1970年 新しい劇団を  
⑭・レポート94号 稽古場建設と映画『同胞』  
⑮・レポート95号 1975年 十年間を振り返って

⑩ 1975年 創立十周年を迎えて

1970年からの公演実績を並べてみよう。

1970年 ● 争議団を解散。独立した劇団を志向 ●

木村快作『希望』 三三回

1971年 木村快作『希望』 一四八回

1972年 木村快作『希望』 一二九回

石塚克彦作『オモチャの青春』 七五回

1973年 ● 第二次本部稽古場完成 ●

木村快作『希望』 七七回

木村快作『今日もどこかで』 六二回

石塚克彦作『オモチャの青春』 七六回

1974年 木村快作『希望』 五四回

木村快作『今日もどこかで』 一一七回

石塚克彦作『ふるさと』 六三回

1975年 ● 創立十周年 中堅以下で幹事会設立 ●

木村快作『今日もどこかで』 一七七回

映画『同胞』の封切り。 一七六回

石塚克彦作『ふるさと』 一七六回

木村快作『帰郷』 五〇回

1977年 木村快作『帰郷』同時2班活動 一三八回

1978年 ● 希望ホール上演開始 ●

石塚克彦作『おっ母さん』 一五九回

1979年 石塚克彦作『おっ母さん』 八二回

1980年 石塚克彦作『兄んちゃん』 一一六回

山田洋二原作『結婚』 一〇三回

1981年 石塚克彦作『兄んちゃん』 一一六回

1982年 ● 劇団分割計画開始 ●

◆ 劇団の再編が始まっていた

創立十周年を迎えた1975年2月の統一劇場機関紙を見ると、劇団員は90名に達している。

しかし、創立メンバー70名は34名になっていた。年齢も30代から40代ですでに結婚して、子供を抱えるようになっていく。家族を抱えたため退団する者もいたし、統一劇場から独立して独自のグループを結成する者もいた。

・1972年 新制作座以来裏方として活躍していた照明音響の技術者が独立して「東京アートプロ社」を設立。

・1973年 3名が小グループをつくって「動く風車(かざぐるま)」として独立。

◆ 当時の生活状況

1975年の事務局の記録が残っている。

全員の居住は小金井市内、劇団本部周辺に散在しており、生活はできるだけ劇団中心の生活を守っていた。

居住費、光熱費などは劇団持ち、

食事は劇団持ち、原則として本部の食堂とする。

子供を抱えたメンバーはすでに何組もあり、生活上の諸問題、医療などは母親グループが担当。

◆ 給与(月単位) 劇団歴は新制作座からの通算。

連帯責任者 劇団歴8年以上、37,200円。

以後1年増すごとに1,000円増額。当時最古参

は劇団歴17年、木村は16年。

準劇団員 劇団歴3年以上 34,000円

研究生 劇団歴3年以下 33,000円

子どもの扶養手当 一人9,000円

その他、運転手、舞台監督などは適宜プラスされる。

【1971年から意識的に取り組んだこと】

◆自立集団を育てよう

1971年、木村が倒れたことを契機に、山形雄策さんの助言を受けながら、積極的に入団者を受け入れ、自分の資質に合ったグループを意識させ、いざという時は自立させるように準備を始めた。

◆研究所制度と劇場組織部の確立

見世物集団ではなく、自立して社会のために働く劇場能力を高めるよう努力を続けた。

新入団者はまず全国で展開している劇場組織部で働く。これは街や村で暮らす人々が、楽しく顔を合わす一晩の劇場を開催しようと呼びかける活動である。

新人はまず教育委員会を訪ね地域の実情を訊ね、地域のさまざまな機関や文化関係者への挨拶回り、そしてできるだけ多くの人と接し、暮らしの側から調べた実情を組織部に報告する。そこで組織部では上演作品の特徴をどのように伝えるかを考える。『オモチャの青春』や『ふるさと』は農村ミュージカルという呼び方で広がった。

新人はこうした体験をベースにした上で公演班に組みこまれ、舞台技術を学ぶことになる。

◆1974年12月、十周年を迎えたということは、思い切って転換するチャンスである。思い切って中堅世代で幹事会を設立し、運営を任せせる。

【時代はどんどん変わっていく】

◆変貌する日本社会

時代の変化は1973年に『今日もどこかで』を制

作した頃から感じていた。苦勞して育てた子供たちが、それぞれ自分勝手な方向に向かって巣立とうとしている。世の中の動きが理解できない父親の、心の葛藤を描いた話である。

十周年を迎えた1975年には『帰郷』を制作するたため、神奈川県海岸部へ行ってみた。ところが見覚えのあった山は切り崩され、大住宅街になっていた。手前に残されたわずかな部分に昔風の農家が残っていた。ここで育った人々はどんな思いで自分の故郷を見ているのだろうかと思った。いい悪いは別にして襲いかかってくる時代の変化に、われわれはどう立ち向かえばよいか。

【自立グループ編成の準備】

◆どの程度のグループを育てるのか

これは木村の見解だが、集団が自由に活動し、みんな物事を決めるには適切な規模というものがある。統一劇場の仕事は各地域でそれぞれ独特の劇場を創り出す仕事で、その日その日で作業の内容を決めなくてはならない。木村は新制作座、争議団、統一劇場の体験を通して、やはり30人前後が適切だと考えてきた。

自立した上演グループを育てるには技術者を寄せ集めただけでは不可能である。作家、演出家、観客組織者、それに俳優を含んだ30名前後のチームが一体となって動く力を持たなくてはならない。そのためには全員がどのようにして作品を制作し、上演にこぎつけるかという全体像を共有しておかなくてはならない。

◆全員で『帰郷』の上演を体験

1977年、スケジュールを調整し、全員が同じ演目を同時体験するため、『帰郷』を2班編成し、同時並行

で120回ずつの全国公演を行ってみた。これまでは幹部や演出家に任せていたグループ能力を全員が身に着けるためである。

公演する地方も違い、当然観客の反応も違うが、総会で顔を合わせた時の議論は盛り上がった。

◆山形教室の開始

そこで夏には休暇を兼ねてみんなで北志賀高原へ出かけ、山形雄策さんを囲んで、戦前からの劇場の成り立ちについての講義を受ける勉強会を開いた。小グループ結成の夢は一挙に高まった。早速、自由に小グループに分かれ、それぞれ希望する企画を上演できるよう準備にかかった。

公演は10月一杯で切り上げて、少人数企画作品に取り掛かる。少人数で劇場を展開することは争議団時代に訓練されていたから、みんな異論はなかった。

時代は変わって行く



★1976～77年『帰郷』全国288回上演

ブラジルへ移住した淳之介が母と姪の暮らしを心配して15年ぶりに帰ってくる。ところが裏の小山は切り崩され、淳之介が拓いた畑も消え、周囲は大住宅街に変っていた。実家には街で暮らしていたはずの姉夫婦一家が住み、母と姪は離れの小屋で暮らしている。「今は日本列島大改造の時代なのよ」と姉はうそぶく。

## ◆常設劇場を作れ

どんなやり方があるだろうと議論するうちに、東京周辺にはかつて全国で取り組んでくれた青年がかなり働きに来てはいるはずだ。彼らに呼びかけて、働く若者たちを集める小さな常設劇場をつくってはどうかという話になった。小さな劇場でいいから気の合う者同士で、自由に作品をつくって上演できる場があれば、多くの青年たちとの交流も深まり、自立上演の道も開けてくるはずだ。

## 【希望ホールの準備】

## ◆常設劇場の候補地が見つかる

小劇場の候補地は1976年から探していた。1977年春、東京山手線の五反田駅から歩いて3分の場所に新築ビルが建設中で、借主を探していることが判った。専門家に調査して貰うと2階フロアへは表通りから階段で簡単に入場することが可能で、間口12㍎、奥行き3㍎の舞台を備えても50人以上収容できると言う。劇場としての開設は法的手続きは困難だが、喫茶ホールということなら可能だと判明。そこに小劇場の建設を決定し、名称は「希望ホール」とする。

◆運営責任者は争議団世代の最古参、清水義方が担当。清水は木村と共に『今日もどこかで』の共同制



●清水義方



●河野光枝

作で劇団のあり方について検討してきた相棒である。

事務責任者には1969年の九州公演の行き詰まりを立て直した劇場部責任者、河野光枝が担当した。

◆希望ホールの経営には年間800万円以上の赤字が予想されたので、生活費確保のため全国公演は石塚作品『おつ母さん』1班にして、残ったメンバーを企画ごとに入れ替えながら、新しい活動を展開できるようにした。もちろん全国班の内部にも企画グループを編成した。

## ◆希望ホール上演の規模

ホールの客席は40人、50人収容できる。当面、毎月1作品とし、土曜日に午後1回、日曜日は午後と夜の2回、4週で合計12ステージ上演が可能。

## ◆要員と設備

①まず喫茶部カウンターを担当する5人は専門の喫茶講習所へ通い、接客方法、諸設備の管理法を学んだ。

②入場者の接待、幕開きの合唱と舞台の雑用を受け持つ若者グループを編成。(写真1)

③近くに10人程度の宿泊が可能で、常駐者の食事、休憩のために使えるアパートを確保した。

## ◆企画グループごとに作品の検討

各グループの作品検討会議は劇団本部で山形雄策さんに見守られながら始まった。(写真2)

山形さんの自宅は府中市だから歩いて30分以上かかるが、気がつくといつも席に座っておられた。

◆観客と共に劇場を学ぶ場にいきなり未経験者がステージを組



1 ★入場者を接待し、幕開きの合唱もできるグループ。内装中の舞台に立ってみる。



2 ★劇団本部3階の作業室・グループごとに作品の検討。山形さん(正面奥)に聞いてもらい、助言を受ける。

むのは無理なので、開設して数ヶ月は木村快作品で出演者5、6人の一幕物『ブーゲンビリアの咲く街で』、『雨上がり』などの上演を準備。

舞台の間口は12㍎、奥行き3㍎の小さな舞台空間だが、企画グループはその上演を、客席で観客と共に体験しながら、自分たちの作品を構想するのである。

## ◆合唱構成劇『港で拾った花』

劇団歴5、6年クラスの中堅を自立させる作品として1977年のうちに、作曲家岡田京子・安達元彦と木村が合宿して創作した作品。これも希望ホールで上演してみることになる。

これまで木村は本格的な合唱構成劇は制作しなかった。木村にとってもいよいよ「見よう見まね作品」でなく、10年間の経験を集約して、自立する時を迎えたのだ。

次号では希望ホールの活動について詳述したい。



## 「岡田京子さんの90歳超えを祝う会」

今村 純二

永い間統一劇場・現代座の上演作品の主題歌を手掛けてこられた岡田京子さんが、今年91歳を迎えた。本当の年齢をバラしてしまうのは、女性に対して失礼とは思うのだが、90歳を超えればこれはもう「お祝い」なのだから、ご勘弁いただきたいと思う。

何か「祝いの集い」ができないだろうか。60年以上のお付き合いしてきた私がそんなことを思い始めたのは今年の7月だった。それから3カ月後の10月15日に「岡田京子さんの90歳超えを祝う会」が実現した。

この日会場に足を運んでくれたのは、新制作座以来のメンバー12名、元統一劇場劇団員30名、各地で劇団を応援してくれた方たち24名、現在のNPO現代座メンバー10名と、予想を超えて70余名となった。

【第一部】は劇団の上演作品・劇中歌を中心に、岡田京子さんと安達元彦さんの代表作をみんなで歌うことにした。劇団初期の『希望』や『帰郷』は、当時の舞台写真をスライドショーで映し出しながら、主題歌の録音を聴いてもらった。

若かった当時を懐かしく思い出してもらいたかったし、知らない人には劇団初期の歴史を知ってもらいたかった。郡上八幡の増田康記さんが「オモチャの青春」を歌い、ぎ・ふりーきっしゅの松島よしおさん一家が「胸いっぱい風の風」を歌ってくれた。全員合唱できる歌は、「ふるさと」、「さようならよい旅を」、「出航・北の海へ」で、これはアコーディオンの岡田さんもピアノの安達さんも大奮闘。会場は大いに盛り上がった。

【第二部】は劇団以外の作曲活動で生まれた曲を紹介した。「花かご」の人形劇。在日コリアンの心を歌った「故郷を思う」は名古屋ひらき座の川瀬まゆみさん

と水谷さんが歌い、「宮沢賢治の短歌に寄せるピアノ曲」は秋山ちづるさんが演奏。ずいぶんと贅沢な内容となったが、それでも本当はもつともつと楽しみたい曲があったと、今は思っているのだが。

「祝う会」を考えた当初は、創立メンバーはみんな高齢だし、小金井まで来てくれる体力はあるのだろうか、60人の規模の会を自分一人で最後まで責任もつてやれるのだろうか、大いに迷ったものだった。それが、司会進行には下地禎子さん。平塚順子さんが応援で参加してくれることになり、記念CD「時代とともに生きた歌」の制作は松島さんの助っ人で完成にこぎつけたし、一人では到底できなかった技術的なこともスタッフに助けられて実現できた。そして「花かご」のメンバーには何からなにも協力してもらった。この皆さんの助けなしには成功しなかったと、心からの感謝を伝えたいと思っている。

その後、「はからずも自身の人生を振り返り、劇団の仕事は有意義でなんと良い仕事をしたのだろうと感嘆しました」「改めて岡田さんの劇中歌の魅力が満喫しました」などと、メールで参加者からの感想が寄せられている。

夢のような三時間あまりの時間があっという間に過ぎて、最後の記念撮影の一人一人の笑顔には満足感があふれていた。「いやあ、みんないい顔しているなあ」と嬉しくなったものだ。

それにしても、岡田さん安達さんが、あんなに元気に演奏する姿は驚きだった。あんなに良い笑顔を見せてくれたことは望外の幸せであった。わたしたちへの最高の贈りものだったと、今つくづくと思っている。

## お知らせ

TEL : 042-381-5165  
FAX : 042-381-6987

## CD「時代とともに生きた歌」ができました



CD 1	
1970年	希望 プロローグ
1967年	雑草の歌・3曲
1973年	今日もどこかで
1976年	帰郷・おじさん
1978年	結婚
1978年	港で拾った花・構成曲5曲
1978年	ブーゲンビリアの咲く町で
1978年	雨上がり
1981年	出航主題歌・北の海へ

CD 2	
1972年	オモチャの青春
1974年	ふるさと
1978年	ひな菊
1979年	カンナ咲く島・3曲
1983年	遙かなる島・7曲
1987年	風は故郷へ・2曲
1990年	もくれんのうた
1978年	夕張川
1992年	朝の風に吹かれて・2曲
1978年	この街

2枚組で1,500円。送料180円

岡田京子さん、安達元彦さんが創った統一劇場・現代座の劇中歌39曲が収められた2枚組のCDです。7ページで紹介した「岡田京子さんの90歳超えを祝う会」を主催した今村純二が、この会を記念して、すべて手作りで作りました。

現代座会館 9月～11月 活動日誌

9月3日 「現代座レポート95号」発送作業

9月27日 NPO現代座理事會

10月3日 「平右衛門フェスタ」実行委員会に参加

9月9日 現代座會議

11月1・2日 屋上他防水工事

9月9日 「平右衛門フェスタ」実行委員会に参加  
第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】

9月2～10月2日 現代座

「わすれものはありませんか？」稽古・公演

10月7～9日 「演劇サークル夢さしの」公演

15日 「岡田京子さんの90歳超えを祝う会」

21～26日 11月5日「THE☆JACOBAL'S」稽古

11月23～26日 「劇好サボテンアミー」公演

27～30日 現代座  
「わすれものはありませんか？」稽古

【二階小ホール】

9月20日 「希望舞台」稽古

10月2・16日 小金井女声合唱団

11月1～6日 「希望舞台」稽古

10月12日 「劇団\*(アスタリスク)」公演

23～24日 現代座  
「誰でもできる朗読教室」発表會

21～24・27日 「スタジオ・ポラーノ」稽古

27日 小金井女声合唱団

21・24・25日 「NPO現代座」稽古

隔水曜・木曜日 朗読教室

毎水曜・木曜日 ヨガ教室

【二階サロン】

9月9日 緑町第2町会役員會

10月21日 こども将棋グランプリ

11月4日 武蔵野朗読會

16日 緑町第2町会スマ木教室

18日 こども将棋グランプリ

毎水曜日 緑町第2町会役員會  
毎水曜日 熟年パソコンサークル

## NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

## ★年会費（現代座レポート購読料を含む）

一般会員 3,000円  
 協賛会員 10,000円（1口以上）  
 郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座